

公募制推薦入学試験

2026年度入試は〈総合評価型〉として実施

〈出典一覧〉

日 文	中村美知夫	『チンパンジー』	中央公論新社
心 理	内閣府男女共同参画局	「令和4年度 新しいライフスタイル、新しい働き方を踏まえた男女共同参画推進に関する調査報告書 第2章 調査結果」P. 66に基づき作成 一部改変	
福 祉	e-GOV法令検索	「こどもの貧困の解消に向けた対策の推進に関する法律」 https://laws.e-gov.go.jp/law/425AC10000000064 , 2024.9.25	
初 教	「政府統計の総合窓口(e-Stat)」、体力・運動能力調査「テスト項目の年次推移」より作成 https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003295660		
安 全	農林水産省	「有機農業をめぐる事情」資料より一部改変（令和6年9月, p17, 18より）	
ビジネス	日本経済新聞2024年 2 月14日	「世界経済の流れを知ろう グローバルサウス 昇竜に 進技術、急速に広がる(学びのツボ)」朝刊35面	
会 フ	日本経済新聞電子版2024年 6 月27日	「女性の管理職への昇進進まず 配属・転勤で評価差」	

問題 次の文章を読んであとの問に答えなさい。

動物の社会学

私は大学時代、けっしてまじめな学生ではなかったが、たまたま出席していた一般教養の授業で、ある社会学の先生がこんなことを言っていたのが妙に記憶に残っている。

社会学というのは不思議な学問で、何が対象なのかはつきりしていません。何をやっても社会学になるのです。

もうその先生の顔も名前も覚えていないのだが、「何をやってもいい」学問というのに不思議な魅力を感じたものだった。のちに私が人類学に足を踏み入れたのも、人類学という学問がやはり「何でもあり」という雰囲気を持っていたからかもしれない。

その某先生が言ったとおり、たしかに社会学という学問が扱う幅は広い。私を知る範囲だけでも、量的なデータを駆使した社会統計学から、具体的に個別の現象を詳細に記述・分析するエスノメソロジーまでじつにさまざまである。扱う対象としても、具体的な時事問題から、より抽象的な自我・他我問題や規則の生成といったことまで、多岐にわたる。

ただし、「何でもあり」のはずの社会学の中で、ほとんど出てこない発想がある。それは人間以外の生物の社会をまともに取り上げようという発想である。これは、いまだに学問の世界が、自然科学 (natural science) といわれる理科系の学問と人文社会科学 (social science) といわれる文科系の学問とに大きく分断されていることと関係するのかもしれない。動物を対象とした学問は自然科学の領域に、社会を対象とした学問は社会科学の領域に入れられる。そして動物の社会に関する研究はどちらにも足をつっこんでいるがゆえに、どちらからも周道的に捉えられがちなのである。

むしろ、人間の社会を扱う論考の中にもヒト以外の動物が登場することはある。しかし、その場合の多くは、ヒトと動物の間に一線を画するため、そのためにだけに動物が引き合いに出されているような気がしてならないのである。たとえば、今村仁司は『社会空間の人類学』の一章で人間の社会空間を論じるにあたって、まず人間と動物の差異から始めている。そして、人間だけが持っている何かをもって「社会」であるとする。つまり、動物には社会はない。「社会的」歴史的な存在は特殊に人間的な存在の本質規定である」からだ。今村の論で言えば、動物は自然的 (「生物学的」) 存在であって、人間だけがそれを否定するような意味での「社会」を持っているということになる。

今西錦司はこういった状況に疑問を投げかけ、動物の社会学の必要性を説き、日本霊長類学 (いわゆるサル学) の礎を築いた。それでも、いまだに人間と動物の間には溝が深く横たわっている。

社会とは

何を扱っても社会学になりうるとすれば、「社会」を客観的に定義することはほとんど不可能であるように思える。ドードー鳥がアリスに言ったように「それを実行すること」こそが最上の説明である、というのは社会についても当てはまることかもしれない。であるならば、社会とは何かという問題は、実際に社会を扱う人々が、いったいどのように社会を捉えているのか、という問題となる。

実際、私たちの経験する社会にはさまざまな側面がある。すでに前章で触れたように、直接的に特定の相手と向かい合っている相互行為は社会の重要な側面である。直面した相手との具体的な交渉は、まさしく私たちが社会的な存在であることをリアルに感じさせてくれる。

前章で見た相互行為の事例の多くは、二個体の間の交渉という形で理解することができる。自分に引き付けて言えば、「私」と「あなた」の交渉である。しかし、もちろん社会には二個体 (「私」と「あなた」) だけではすまない側面もある。直感的には、二者が三者に、そして三者が「集まり」となることで相互行為の質は変わっていくように思える。同じ人に同じことを言うとしても、二人きり有的时候きに言うのと、集まりの中で言うのと、その意味が異なるということとはたしかにある。

さらに、直接的に面前に相手 (二人であろうが複数であろうが) が特定される状況だけが社会的なわけではない。たとえば、社会的常識、世論、規範などを作り出している他者たちを、私たちはつねに具体的に指定できるわけではないし、そのような他者たちと直接的に相互行為をすることもない。にもかかわらず、こういったものはきわめて社会的なものであり、つねにリアリティを持つ形で私たちの周りにある。

もう一つ、社会には空間的なだけではなく、時間的な継続性があるということも重要であろう。ある個人の社会的な行為は、ある瞬間だけで決まるわけではない。それは、その人のこれまでの経験や相手との関係の歴史の上に成り立っているからだ。そして、相手の側にもまた、そういった経験や歴史があるということも無視できないだろう。

個人を超えたレベルでの歴史性も存在する。たとえば、どんな社会の中で育ち、どんな両親の下に生まれ、兄弟姉妹が何人いて、どんな教育を受け、どんな人々に出会ってきたか。こういった事柄は、その人が社会的に振舞う上で、大きな影響を与えているはずである。その多くは、個人では選択のしようもないことである。

時間的な継続性が問題になるのはかならずしも過去だけに限らない。今後この社会の中で過ごしていくだろうという可能性、その中で誰かと出会う相互行為を繰り返すかもしれないという茫漠とした期待 (もしくは虞慮) も、それらもまた社会の重要な側面であると思う。

結局のところ、私たちは、自分の行為を完全に自分だけで決められるわけではない。自分で決断をしているつもりでも、直面する他者、直接会ったことのない匿名の他者、それまでに関わってきた他者、そして将来関わるかもしれない他者たちが、良くも悪くもつねに私に影響を与えている。それらは、私が食べたものを私の一部にするように、私自身と溶け合って分離することはできない。

(中村美知夫 『チンパンジー』 中央公論新社 二〇〇九年)

問 (一) 傍線①にある「社会とは何か」という問題について、筆者はどのように述べていますか。また、(二) あなた自身は「あなた」と「社会」との関係性をどのように捉えていますか。具体例を必ず一つ以上あげて述べなさい。(一)と(二)をあわせて八〇〇字以内で述べなさい。

1

人間文化学部 日本語日本文学科 小論文 (800字) (60分)

2

人間文化学部 日本語日本文学科 小論文 (800字) (60分)

人間文化学部 歴史文化学科 小論文 (800字) (60分)

課題図書『ジャポニスム 流行としての「日本」』（宮崎克己著）を読み、ジャポニスムと呼ばれる西洋における日本文化の流行現象の歴史的背景を 300 文字程度でまとめたい。さらに、作品名の中から特に関心を持った事例を取り上げ、それに対する自分の意見を述べなさい。全体の文字数は 800 字以内とする。なお、本書名等の特記事項には減点の対象とならない。

A blank grid paper with a vertical axis on the left and a horizontal axis at the top. The vertical axis is labeled from 0 to 800 in increments of 100. The horizontal axis is labeled from 0 to 25 in increments of 5. The grid consists of 8 rows and 25 columns of squares.